



これは世につたえておきたい
かたっておきたい
わが胸の底から真実のおもい
人生幾山河めぐりあい
あの日の風やひかり そして空のひとひら
哀歎のかがり火に生きた幾年月の路
「自分史図書館」はその証言館です。



私の稀観本ノート その10

椎窓 猛

○「秋澄」河津武俊著（講談社刊）
秋の季節にふさわしい本をと思い河津先生の「秋澄」（しゅうちょう）をとりだした。河津先生は日田市で内科医院を開業のかたわら創作活動に励まれている。この本は、昭和63年の発行。すでに17年余の遠い日になるが、「九州文学」にときおり詩を発表していた岡田徳次郎を描かれたものでびっくりした思い出がある。
そしてこの詩人は「銀杏物語」という一篇の小説で、昭和30年芥川賞候補にあげられた経歴もあることを初めて知った。ひたむきに純粋に文学に打ちこみ、漂泊波乱の生涯をおくった詩人の感動的なノンフィクション。
「銀杏物語」は、名古屋の同人誌『作家』に掲載の小説で、銀杏の大樹を境内にもつ寺のかたすみで、人縁薄く生涯をおくる女の静かな暮らしを静かなタッチで描かれている。
河津先生が漂泊憂愁の詩人を語るに「秋澄」と題された所似がよくしみてくる一冊である。

（自分史図書館長）

八十路坂
童地蔵児を抱く御手に夏陽さす
七曲り火伏せの神に秋の風
紫の雨のしづくや秋茄子
難聴も亦よきことよ秋の雷
風去りてちちろの声のひとしきり

※「まえがき」「あとがき」も無きさっぱりとした句集「八十路坂」抄

八十路坂

椎原加寿子

歌集女王蜂

近藤喜造

知床の岬をめぐる朝まだき観光船は煙吐きをり
知床の森繁の歌碑陽に赤く小高き丘の麓に立ちをり
知床の海より見ゆる丘の上につばさやすむる海鳥のむれ
「国後はあのあたりよ」と娘は言へど島は見えざり白き雲湧く
愛蜂の霊をまつりて五十年花を求めてさすらひの旅

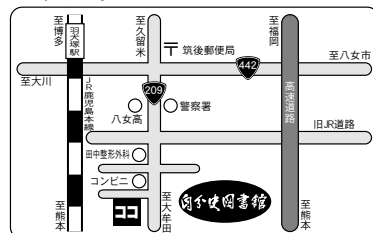
※明治35年八女・長峰に生まれ、養蜂業、昭和58年永眠

「しづかの海」

市川紫都香

久留米大学教授保坂恵美子先生の紹介で寄贈されたエッセー集である。保坂先生は、「私の親しい友人ですが、かつて教師を勤めた経験や少年院の子どもとの関わりの経験などから、現代の子どもと子育て問題をまっすぐな目でみています」と紹介されている。内容は「少年院との出逢い」「明治生まれの人たち」「三世同居」「女三人アメリカに行く」など多彩な体験談。気どりのない、さらさらとしたタッチ。「秋風が吹き、あの暑かった夏の名残がだんだん消えていきます。秋が大きな足音をたてて忍び寄っています」といった調子で読者の胸を洗うものがある。「天に向かう摩天楼、地に向かう地下鉄」などのアメリカ探訪記も読みごたえがある。好著お礼申しあげます。

開館 午前9時～午後5時 入館無料
休館 土曜・日曜、祝祭日、年末・年始、その他
休館することがあります。予めご確認下さい。





○書いてまた消す
ごはんの便り

河村 秀俊

河村秀俊氏は霧島病院外科医長、副院長歴任後、80年河村クリニック開業の鹿児島のお医者である。60歳を迎えられての記念の出版。

河村先生は北朝鮮平安北道でのお生まれ。「故国への旅路」を読めば、引揚げまでのご苦労が理解されるが、隣のちに作家として活躍した大藪晴彦氏が住んでいたとか。よく先生は何科ですかと訊かれる。「僕は五ナイ科ですと答える。相手は目を白黒、車の運転ができない。ゴルフをしない。コーヒーを飲まないなどなど五ナイ科。楽しいエッセー集である。



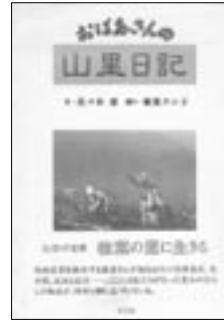
○豆つぶ先生、がんばる

瓜生 桂子

「私は生まれてこのかたずうっと女。教師にならずいぶん長い。」「私は身長わずか145センチ。文字通り豆つぶ教師。小さいのでいつでも、誰からでも、上から見降ろされる。…」

先生は1954年、福岡女子大学卒業後、高校教師。

このエッセー集は、博多の街の質屋さんの娘という育ちから、高校教師としての暮らしむきが明快面白く描かれている。例えば母の話。「もう、あたしゃ、齢ゃわからんばい」積み上げた齢はサッサとうしろに捨てていく、明治生まれのお母さん。



○おばあさんの山里日記

文 佐々木 章
語り 椎葉クニ子

宮崎県椎葉村は、九州山地の中央部、標高900メートルの深い山里。今なお、「やば」(焼き畑)を続ける椎葉さんの家へ、佐々木さんは20年以上通いつづけおりおりの山里の農耕儀礼、食習慣、民家、民具について、四季の移り変わりにそって、聞きとり、まとめられた労作。

焼畑の白いソバの花、キブシの花などの写真も美しいが、椎葉日添神楽を舞う子どもの表情もよい。10月は「山の神様まつり」

貴重な九州山間民族学原資料でもある。



○向日葵ひとすじ四十年

原口 西男

原口西男さんは大正10年熊本県菊鹿町の生まれ。

あとがきに「司法修習を終って、弁護士登録をしたのが昭和31年、いつのまにか40年をこえ、齢も76歳。このへんで記録をまとめておけば自分の記念にもなろうし、これから弁護士になろうとする人に他少参考にも——と上梓。

弁護士登録までの「私の昭和」はまさに自分史。特記として注目させられるのは、「カネミ油症事件」

氏は向日葵のバッジを誇りにし、この道を歩いたと回想。

編集掌話

▼自分史図書館「ya」も10号をかさねた。愛読者からのお便りも再三。来年度からは会員を募集し、切手代だけを支払っていただき、きちんとおとだけできるように運営を考えてみたい。

▼今年満80歳をかぞえるといわれる筑後市の菊田サチ子さんは、なにやら懐かしい思いで、図書館に足を運び、めずらしい本を見つけてくれた。館長不在、お許しください。
▼「自分史図書館目録」平成17年度版が一応出来あがった。寄贈冊数千五百三十五冊余。県内のみならず九州はもとより、関西、関東にも及ぶ。街の書店、または通常の図書館では見られない極少数発行の本などは、世にかくれた本の「宝」といってよい。これこそ「自分史図書館」の大きな特色だといってよるしい。館における読者の皆さんへのサービス方法も創意していきたい。「ya」クラブなども組織したりして、「小さな本」大賞なども設立したらおもしろくなるだろう。
▼この七、八月は戦後60年、還暦の夏といわれただけに無名一兵士の記録集も目立った。
▼鹿児島伊集院の岩元一夫さんはせつせつとした便りを添えて「ある兵隊の記録」を送ってくださいました。「戦争は悲惨なものだ」と心の底からの体験からの訴えである。

受贈図書紹介 ⑩

順次紹介していますが受贈日より多少遅れます。あしからずご了承下さい。

蔵書目録ができました
¥240 送料込(郵便切手可)

小田部土佐	……………小田部昭典	三 瀧 町	半世紀のあしあと……………	久留米市鳥類センター
いつ死ぬかわからない	……………小林 清子		渦 卷……………	手島 真 うきは市
生涯学習	……………草野 實	福 岡 市	海の床棟……………	武藤 泰勝 大牟田市
父母の心・私の歩み	……………手嶋 貞夫	筑紫野市	桜色の最終章……………	塩田 博 福 岡 市
病気と私	……………田所 敏明	北九州市	いのちをつないで……………	賀久 はつ 宗 像 市
育みて今	……………永井 暢一	大牟田市	詩集 北極上空……………	黒田 達也 福 岡 市
荒野の風に吹かれて	……………紀元 一夫		わが青春……………	岩松小夜子 北九州市
句集 金港……………	大川 知治	横 浜 市	年々去来の花……………	湯川 久子 福 岡 市